

## 房総の俳諧

―白井鳥酔、加舎白雄の

両総行脚から―

加藤 時男

本日は五・七・五の十七文字と云う最も短い文芸である俳諧が江戸時代後半に庶民のあいだに普及した実態とその意味―特に房総に定着して行く過程を中心に考えたいと思います。その際、白井鳥酔・加舎白雄師弟の明和三年の房総行脚を軸にみたいと思います。

まず最初にレジユメの「はじめに」というふうを書いておきましたところでは、全体として一般庶民に俳諧が広まっていくということについての歴史的な意味というか、いろんな意味合いがあると思うんですけども、最初に二点ばかりそこに挙げた点を考えておきたいということなんです。

一つは、ここに挙げた「庶民文化の普及」ということです。(文字文化の民衆への普及とネットワークの形成)というふうには括弧の中に書いておきましたが、日本の歴史の中で文字というのは、圧倒的に支配者のものであり、一般農民、庶民が文字に親しむということは、やはり江戸時代以降だと思えます。そういう意味で、本来文字というのは支配者の独占物だった。それが俳諧という非常に親しみやすい五七五の十七文字の文芸を媒介にして、一般農民の中にも非常に広がっていくという意

味が一つあるのではないかということです。

それと関連しながら、俳諧によるネットワークの形成ということも考えないといけないとおもいます。俳諧というのは「連」とか、あるいは「連衆」という組織を基本とする文芸です。要するに一人で作ったり楽しんだりするそういう部分もありますけども、本来グループをつくって、それをお互いに示したり、あるいは宗匠、先生にそれを見てもらったり、さらにその「連」が他の「連」と交流したりします。その「連」のグループのメンバーを「連衆」というような言い方をするわけですけども、本来的にそういった人と人とのつながりを、俳諧を通してつながっていくということを本来的に持っているんだということなんです。また、その契機も地縁血縁は勿論、商品流通や宗教など多面的でありました。その辺に俳諧が江戸時代後半に広がっていくことの歴史的意味があるのではないのでしょうか。

それから二番目に「在村文化の形成」というふうには書いておきましたのは、いわゆる江戸時代の文化、その前の文化もそうですけども、われわれが学校の教科書なんかで江戸時代の文化という場合に、元禄文化とか、あるいは文化文政時代の化政文化とかいうようなことが教科書に書かれてあるわけです。そういったものはすべて都市の、特に元禄文化というのは関西を中心にして展開していた。それが江戸時代中期以降の化政期になると、江戸へ中心が来たとかというような書き方が、高等学校の歴史の教科書なんかには出てくるんですけど、ところがその場合にすべて都市、大阪とか江戸とか、都市を中心として展開されてる文化なわけです。

ところが江戸時代後半に出てくるこの俳諧を中心として、農民の中

に、農村、要する在地で俳諧を媒介にしながら広がっていく、それを「在村文化」という言葉で表すようになってきました。これまで俳諧は文学を専攻する方々が中心的に研究してきていたわけですが、最近では歴史を研究する方々が、文学としての俳句ではなくて文化としての、あるいは農民の間に文字文化が普及していくとか、農民の間の相互の連携が深まっていくとか、そうした点に注目した研究が進んでいます。そういった実態が江戸時代後半には非常に広がっていくんだという意味を込めて、「在村文化」という言葉が盛んに使われるようになりました。これは新しい言葉のようですけども、そういうことを研究する人たちも増えてきました。

そういったことを通して、江戸時代後半に農民の間の教育水準とか、あるいは識字率、文字を書いたり読んだりする能力が非常に高まって、恐らく江戸時代後半の識字率、あるいは教育レベルというのは世界でも日本は一、二だと思っんですけど。そういった状態が出てくる一つの契機として、俳諧の広がりということもあつたんじゃないかということが、そこに表記の「在村文化の形成」という意味であり、それが次の明治維新を可能にしていく。明治以降の日本の近代化を可能にしていくバックボーンにあつたんだということが、言われるようになってきていっているんじゃないかと思うんです。

大きく言えばそういったことも含めて、江戸時代後半に俳諧が農村にまで広がっていくということについての意味を、まず最初に確認しておく必要があると思います。ほかにもいろいろあると思うんですけど、「はじめに」ということで、そういった大きな意味を考えた上で、では次に具体的に、(2)というところから以下ですけれども、それでは俳諧が

この房総に、この千葉県にいつごろどのようにして一般農民に、千葉県ということとは農村ということなんでしょうから、俳諧が広がっていったかということを考えてみようということなんです。

そのときにこの房総に俳諧が広がっていく契機として重要な役割を果たしたのが、そこに「白井鳥酔、加舎白雄の俳諧史における位置」というふうに行書いておいたことです。白井鳥酔、加舎白雄といつてもあるいはなじみのない名前かもしれません。そこでこの二人、白井鳥酔、加舎白雄について、俳諧の事典からそのまま引用したんですけども、鳥酔、白雄について概略をそこへ書いておきましたので、少しだけ読んでみます。

鳥酔については、元禄十四年に上総の地引村、というのは今の長生郡長南町で、現在でもそこに子孫の方がおられますけども、地引村に生まれて、江戸に出て、佐久間柳居に入門し、その主張を継承し、蕉風俳諧復興に尽力したというようなことで、後半生には多くの俳書も出版しております。これは当時の出版事情からすると大変なことなんです。

この鳥酔のお墓は品川鮫洲の海晏寺と、それから長南町の正善寺というところにあつて、長南町の正善寺のお墓というのは千葉県の史跡に指定されており、白井鳥酔は千葉県の偉人の一人になっています。俳諧を専門にやっているとさういふ人ではないと、なかなか鳥酔の名前まであるいはなじみがないかもしれませんけど、日本の俳諧史においても重要な役割を果たしたというところで、千葉県の史跡にもなっている。品川の鮫洲の海晏寺の墓所は、これは戦前は東京の史跡でもありました。ですからそれぐらいに鳥酔というのは、俳諧史の中で重要な役割を果たしているということがお分かりいただけると思うんです。

鳥酔は実はいか所お墓があつて、分骨です。もう一つはどこかかという、大磯なんです。大磯という、西行で有名な鳴立庵があります。が、その中に鳥酔のお墓があります。

一方、鳥酔の弟子、孫弟子ぐらいになるかもしれないけども、ちよつとそれはいろいろ経緯があるんですけども、加舎白雄は、そこにありますように元文三年、江戸深川の上田藩の藩邸に生まれるというところで、信州の上田の出身の方。江戸で生まれて、大体江戸で活躍しています。そして天明の時期に活躍して、日本を代表する天明期の俳人として与謝蕪村と並んで、「西の蕪村、東の白雄」とちよつと白雄をオーバーに言ってますけども、というふうに称されるほどの大きな役割を果たした俳人なんです。

そして、その鳥酔、白雄、この二人、師弟が房総に非常に縁がありまして、関東を中心にして多くの門弟を育成して、勢力を広げていくんですけども、中でも鳥酔のふるさとである房総には何度も足を運んで、その門弟が結構多いんです。その二人の房総への足跡、行脚の跡をたどりながら、房総にどういう門下が育成されてというようなことを今日は考えていこうということなんです。

それを考える場合に、そこに「白井鳥酔、加舎白雄の俳諧史における位置」と一言書いておいたんですけども、それについて、鳥酔と白雄という経歴の間に、ちよつとそこに「享保十六年（一七三一年）佐久間柳居ら『五色墨』出版」と書いておきましたけども、それが一つ、この二人の俳諧史における位置を考える場合に重要な意味があるんです。

というのは、俳諧といいますと誰でもご存じのとおり、元禄の芭蕉によって俳諧という文芸は一つの到達点に達するわけです。その俳諧が次

に江戸時代に大きく盛り上がるのは天明中興俳諧ということで、与謝蕪村とか加舎白雄を中心とする天明期に非常に高まっていくということが言われているんです。

ところがその間に約一〇〇年間、元禄と天明の間に約一〇〇年間あるわけですけども、順風満帆で元禄から天明に発展したかという、そうではなくて、芭蕉が亡くなった後、芭蕉の残した俳諧というのは少し寂れるという、量的には広がっていくんですけども、内容的に芭蕉の精神が少し置き去りにされたというような中で、芭蕉の俳諧、いわゆる蕉風俳諧というのが少し衰えていくというようなことが言われているわけです。

そういった時期の享保十六年、この「佐久間柳居ら『五色墨』出版」というのは、「五色墨運動」といまして、『五色墨』という当時の新興の俳人、江戸の俳人たちが五人で句集を出して、そして従来の芭蕉没後に多少墮落していった、世俗化した俳諧を批判するというふうなことが起こるんです。それがいわゆる「五色墨運動」というふうに言われているんですけども、そしてそこでは「芭蕉の精神に返れ」というような一種のルネサンス運動みたいなものが起こってくるわけです。

その中心になったのが佐久間柳居という江戸の俳人です。この人は白井鳥酔の先生なんです。そしてその柳居の「五色墨運動」がきっかけになって、もう一遍芭蕉の精神をとということになるんですけども、そのことについて、関連資料として、お配りした資料の中の二枚目に「房総の俳系」という、芭蕉を頂点にしたその後の師弟関係とか、俳諧というのは、先ほども申し上げましたように、「連」というようなグループを通して発展していきますから、そういう師弟関係を中心とした特に後半の

ほうはこの千葉県で活躍する俳人を中心にして系譜を作って、そこに示したんです。

その系譜の中で、芭蕉を頂点にして、その後、榎本其角とか服部嵐雪とかという芭蕉の弟子たちが俳諧を広げていくんですけども、ところが芭蕉が亡くなった後、芭蕉の「わび」とか「さび」とかという芸術性の高い俳諧の精神というのが、少しないがしろにされていくというような動きが享保のころ出てくる。

その表で、ちょうど芭蕉の右のほうに中川乙由、その次に佐久間柳居という、そこに書いてあります。この人が白井鳥酔の先生なんですけど、その佐久間柳居とか、それからその二つばかり上に杉山杉風の次に中川宗瑞という人がいますけど、その人とか、あるいははずっと下のほうに山口素堂の次に長谷川馬光という人がいますけど、これは小林一茶なんかの系統の先生になっています。その辺の三人、あるいはほかにあと松木蓮之、大場咫尺の二人、当時の江戸の若手俳人が五人で『五色墨』という自分たちのこうあるべきだというような句集を出して、従来の江戸で盛んだった、榎本其角とかさういった人たちのグループの俳諧を批判し、「芭蕉の精神に返れ」ということを言ったのが「五色墨運動」というんです。

そしてその運動自体はそれほど高まったわけじゃないんですけど、口火をきったことに大きな意味がありました。その中心の佐久間柳居のそういう精神を受け継いで、「芭蕉に返れ」という運動をさらに展開したのが、今日お話の中心である白井鳥酔です。この人が柳居の一番のお弟子さんで、そして柳居の精神を受け継いで、芭蕉の跡の奥の細道をたどったり、あるいは大阪へ行って、あるいは芭蕉のふるさと、伊賀に

行って、いおりを組んでというようなことになるわけです。大体俳人というのは旅から旅へというのが生涯の通例ですけど、この鳥酔も房総にもいろいろ旅しましたけど、房総だけじゃなくて、全国に、関西のほうにも、生涯そういうふうな旅から旅への中で門弟を育成したり、芭蕉の精神を鼓吹するということで、非常に大きな役割を果たしたんです。

ただ、関西のほうではなかなか思うように門下を獲得することが出来ず、結局はあまりうまくいかなかったんです。ですから鳥酔の門下、その精神を受け継ぐというのは関東とか、それからあとは信州、長野県を中心として門下広がっていきます。そうではありますけども、関西のほうにおいても芭蕉の遺跡を保存したり、作品を発掘したり盛んに運動を展開していったというのが、白井鳥酔なわけです。

そしてその白井鳥酔のお弟子さんとして、その門下でその精神を受け継いでいくのは加舎白雄ということなんですけど、実はその次の系図のところ、加舎白雄というのは直接鳥酔の弟子になっていない。というのは、実は鳥酔の門下に、その次のところに系図で一番上に杉坂百明、これは（東金）と書いてありますけども、あるいは白井三瓦、それから昨非窓左明、それから作田東睡。作田東睡は東金の田間というところにお墓があつて、これは東金市の史跡になっていますけど、この作田東睡も鳥酔の同門なんです。同門で、非常に東金地域に鳥酔系、佐久間柳居の系統の俳句を広げていく役割を果たすんですけど、その中心は鳥酔ということなんです。

その下に、木耳庵鳥明、「鳥明」と書いてありますけども、その後の寺井弄船、田中百井なんていうのは銚子。銚子も非常に鳥酔の勢力圏なんです。その中で一番上の百明、それから一つ飛んで左明、左明という

のは(九十九里)と書いてありますけど、九十九里に一時いたらしいんですけど、実際には江戸の人で、江戸の武士なんです。それから鳥明、この人も江戸の商人なんですけども、百明、左明、鳥明、この三人をみんな「明」という字が付いてますから「三明」というふうについて、鳥酔の三大弟子ということになっております。

この三人については、俳諧のいろんな事典にも名前が出てくる人です、それなりに俳諧史で名を残したということだと思っんです。

そしてその三番目の鳥明という人のお弟子さんに、この加舎白雄が入っているわけです。実際、加舎白雄は鳥明の弟子になるんですけども、ところがその後、鳥明の先生の鳥酔にも接触をする中で、鳥酔に心酔していくんです。逆に鳥明よりも鳥酔のほうに傾いていくというか。その中で、鳥酔の俳句の精神を最も受け継いだのが加舎白雄だということになるんですけども、そのために後に鳥明と白雄は仲違いして、鳥明によって加舎白雄は破門されちゃうんです。破門されたといっても、もとも俳人としては加舎白雄のほうをはるかにレベルも高かったし、江戸で門人もたくさん育成しています。結局、破門したとはいいながら、白井鳥酔の系統の門下は鳥明に付くか白雄に付くかということで分裂するんですけど、白雄のほうが圧倒的に有能だったし勢力もあつたんで、結局房総の俳人たちは白雄の系統が多くなっていくんです。それは全部が全部じゃないんですけど、そういう方向で進んでいくことになりました。

なお、そのうちに百明、あるいは鳥明とか、そういう人たちの門下でこの地域の、この東金、山武を中心とする地域の俳人たちをそこに挙げておきました。俳諧の事典を見ても名前は出てきませんが、地域で農業、商業に従事しながら「在村文化」の担い手として活躍した、鳥酔門

下の俳人として、地元、この地域にはいろんな資料が残ったりしているということなんです。

例えばその中で、地元の東金を中心にちょっと見てみますと、例えば広瀬求魚、この系譜の中で(東金)と書いてあつて、これは地元の方だと、地元以外の方もたくさんおられるようですけども、東金の広瀬の人なんです。という、地元の人は、あ、あちらの人だということに分かると思います。

それから君塚天年、これは(東金)と書いてありますけど、東金の前之内という、ここ城西国際大学のすぐそばです。あるいは篠原鶴洲、これは東金の堀上というところで、これもすぐ地元の人は分かる感じですよ。あとその鶴洲の下に関原巨梅(東金)と書いてありますけど、この人は東金の最福寺に句碑があります。

あるいはその下のとこに飯田雨林(東金)、この人は本漸寺にお墓があります。内田梅香とか、この人も東金の人、東金の豪商の夫人なんです。勝田乙驢というのは、これは東金の田間の勝田といえ、また分かる方もおられると思いますけど、そんなふうなことで、当時の東金から山武郡を中心とする有力なお宅の先祖が結構、鳥酔、加舎白雄の門下に組織されている、地元で活躍するということになります。そういうふうに白井鳥酔の系統、加舎白雄の系統が、この房総の中でも東金、山武郡に広がっていくということなんです。

もう一つ全体として、先ほどの話に戻りまして、天明の俳諧ということでは、佐久間柳居、白井鳥酔のそういつた「芭蕉に返れ」という精神を継承しながら、そういった方向が花開くのが天明という時期だと。そしてその天明の五傑といわれて、後に近代俳句の祖、正岡子規によって

大きく評価されて、天明俳諧というのがクローズアップされるわけです。

その正岡子規の評価を受けた五傑といわれる俳人がその表の四角でくくった、与謝蕪村、それから二番目の大島蓼太、それからしばらく飛んで高桑蘭更、それから加藤暁台、それからちよつと右のほうへ行つて加舎白雄というこの五人が、近代俳句の創始者、正岡子規が、芭蕉以後衰退した俳諧が天明の時期にまた復活したというような評価がされて、中でも蕪村、蓼太、蘭更、暁台、白雄、この五人が、これは高等学校の国語の教科書にも俳諧史で出てくる「天明の五傑」と言われております。中でも関西では与謝蕪村だし、関東では加舎白雄とかいうふうな言い方がされるわけです。そういう中で、鳥酔というのは大きな役割を果たすと同時に、門下から加舎白雄を輩出したということが俳諧史における大きな役割になったと思うんです。

それでは、また最初のほうのレジユメに戻りまして、そういうふうな二人の俳諧史における位置付けを確認した上で、その二人がこの房総にどういうふうにして門下を育成し、具体的にどういうふうな行動をとっていったのかということ、次に考えてみましょうというのが次の問題なんです。

そこでその次に、「はじめに」に続いて一ということを書いておきましたのは、今日のテーマの中心である鳥酔、白雄がこの房総にどういうふうにして門下を拡大する、そのために行脚をしたり、あるいは育成した門下に呼ばれて房総に足を踏み入れていったかということ、考えてみましょうということなんです。

最初、全体として、一ということに書いておいたのは、白井鳥酔と

加舎白雄が現在分かっているこの房総へ足を踏み入れた、いつ何回ぐらい来ているかということ抜き出したのがその年表なんです。あと細かいことはその表で見たいんですけど、最初に来たのが、鳥酔が寛保二年に先生の、まだこのころは佐久間柳居が存命なわけですけども、佐久間柳居を案内して、自分の故郷の地引村に案内して、そこから小湊とか鹿野山とか、あるいはこっちの東金のほうにも来ているようですけども、それが一番最初の、江戸のそれなりに著名な俳人が房総に足を踏み入れて、門下を育成していく、組織していくという最初であったのではないかと、うふうに考えられています。

それまでは個人的に江戸へ行つて、江戸の宗匠に俳諧を見てもらうとか、あるいは飛脚便で江戸の宗匠に俳諧を送つて見てもらう、そういうふうな個人としての俳諧につながっていくことはあつたとしても、地域の人たちがグループとして、いわゆるさきほどの「連」といえるような形で組織されたり、俳諧活動をしていくというのはどうもこの辺からではないかと、房総では。というようなことが考えられているわけです。

その後、鳥酔が江戸で活躍していく中で、地元房総へも何回か足を踏み入れていく中で、門下も広がっていく。鳥酔は、先ほど申し上げましたように房総だけじゃなくて、大阪とか伊賀とか東北、芭蕉の『奥の細道』の跡とか、非常に全国的に歩いています。あるいはこの関東でも今の群馬とか神奈川にも非常に門下が多いんですけど、そういう中で、この地元の房総にも何回か足を踏み入れているということです。

その中で、今現在分かっているいろんな記録なり、いろんな本の中で分かっているのが、そこに挙げたようなことなんです。そして今日は

その中の明和三年、そこに「両総行脚、昨鳥」というのは、加舎白雄がこのときには昨鳥という、俳人というのは号を変えますから、この時期は昨鳥と違ってたんですけれども、先生の鳥酔に付いてこの房総を行脚していく。そのときの記録を中心にして、今日は少し具体的に足跡をたどってみましょうということなんです。

なお、白雄については、その明和六年に鳥酔が亡くなるんですけども、その前年の明和五年も含めて二度、鳥酔と一緒に房総に来ると同時に、亡くなった後も何回か来ています。その中では、そこに天明四年、「両総行脚」と書いておきましたのは、その天明四年にこの山武のほうに白雄が来たときの資料が地元に残っています、それによって幾つかのことが分かったんです。

その両総行脚のときには、そこに「常世田長翠従う」って書いてありますけど、この常世田長翠という俳人もかなり全国的にも著名な俳人で、加舎白雄の一番弟子、二番弟子ぐらいになる人なんです。この人が実は木戸村という、横芝光町の出身というふうに言われているんですけども、ところがその木戸村のどこのお宅の人でというようなことがいまだに分かっていないんです。ですから木戸村の、常世田というのは、確か銚子のほうに常世田という名字が多いですよ。ですからどちらの常世田さんの先祖だとかいうことが分かって、いろんな資料が出てくると大変参考になります。この常世田長翠というのは俳諧史でもかなりの重要な役割を果たした人なんです。このときに、常世田長翠と一緒にこっちのほうに來ているんです。

そこで天明四年のことも少し含めながら、明和三年の鳥酔、白雄師弟のこの房総への歩みをたどりながら、具体的に房総への行脚の動きを見

てみようということが、今日の中心的なテーマであります。下のほうの二と書いておきました、「明和三年の両総行脚の具体的行程」ということで、そのことを考えていきたいと思っています。

なお、関連して言いますと、明和三年の春、秋から冬にかけてこの房総へ来るんですけども、この年は非常に重要な年でもあり、前半の春には、例の大磯の鳴立庵に鳥酔はいるんです。その大磯の鳴立庵はこのとき創立というか、鳥酔がこの春に大磯鳴立庵を築いて、鳴立庵を再興する。平安末期の歌人西行の歌枕で有名な鳴立庵を大磯で再興していることです。

この明和三年の鳥酔、白雄師弟の旅は、翌年紀行文『玩世松陰集』として出版されています。これは平成一四年刊行の『千葉県の歴史』資料編に収録され、活字化されておりまして。そこで、この紀行文により鳥酔、白雄の旅をあとづけてみたいと思います。元来、この旅はヒゲタ醤油の先祖田中玄蕃百井など銚子に多くいた鳥酔門人を訪ねることが目的であったので銚子における記事が圧倒的であります。その途中は点と線のみであります。ところが、その空白を埋めるような史料が地元、山武郡に残っております。そこで『玩世松陰集』の記述と地元史料を手がかりに鳥酔、白雄の足跡をたどることに致します。

まず、鳥酔は生家地引村で七月十三日に両親の法要を営んだのち銚子へ出発します。『玩世松陰集』にある最初の記事は「大網野野酔子のもとに投宿す」というものであります。その途中の茂原周辺の記事はありません。大網野野酔子については、地元の史料として、板倉野酔亭で揮毫した懐紙が発見されております。そこには「北総へ赴とて七月念五、このころあつさの日大あみ野野酔子のもとに扶老を靠ぬ」とあり、大網通

過が七月二五日であったことが分かります。この懐紙は、現在、長南町郷土資料館が所蔵しておりますが、その入手経路は不明です。元来、大網板倉家にあつたものですが、板倉野酔の子孫がどちらの板倉家であるかは判明しておりません。

ここから鳥酔は東金の門人を訪ねますが、途中、田中村の「赤人塚」に立ち寄っています。このときの感懐を同行の白雄が「赤人社頭詞」として残しております。赤人塚は当時から文学遺跡として名が知られていたらしく、鳥酔の師佐久間柳居も立ち寄っているし、白雄は天明四年の行脚のときにも寄っています。

ここから門人の多くいた東金に行き一〇数日滞在しております。東金の有力門人杉坂百明のもとでは句会も開かれたと思われ「遊土籠庵 東金殿下」という記事もあります。百明は土籠庵と号し、左明、鳥明と並んで「三明」といわれた鳥酔門人を代表する一人でありました。また、鳥酔のあとを継いで「鳴立庵」四世ともなっています。因みに「鳴立庵」五世は白雄です。東金ではさきに触れた君塚天年、勝田乙驢、飯田雨林、内田梅香なども集まったものと思います。

ここから銚子を目ざしており、『玩世松陰集』では、東金について銚子の記事となっております。しかし、実際には途中、成東や横芝など門人宅を訪問していると思われれます。成東では富田村の大高鳥湖、亀足父子―「子育て善兵衛」の先祖です―などを訪ねていると推測されますが、このときの直接の史料は残されておりません。しかし、関連史料としては、大高家から鳥酔系門人の採点帖「亀足集」六〇余冊が発見されております。

次の横芝では、このときの足跡を実証する珍しい史料が発見されてお

ります。それは小堤村（横芝光町）の神保家から発見された鳥酔の懐紙であります。

この懐紙には、まぎれもない鳥酔の真蹟で「過日社夜松亭・・・」という前書に続いて「落栗や三とせのうちにもとの庭 丙戌仲秋 鳥酔」という句が揮毫されております。このことにより、間違ひなく鳥酔が明和三年の八月に神保家に立ち寄っていることが証明されます。さらに、この懐紙の貴重なことは、約二〇年後の天明四年に白雄が再度神保家に立ち寄り、この懐紙を実見し、「ふところ紙にしるせし真蹟はたとせを経て此家に拝す・・・天明四年春二月 白雄書」と極め書きをしていることでもあります。このことにより、白雄の天明四年の房総行脚が実証されることになりました。僅か一枚の懐紙ですが、様々の情報を提供してくれました。神保家からは、この他にも鳥酔、白雄の短冊や鳥酔系俳人、神保一族の短冊、懐紙なども発見されております。昭和六四年のことです。

ところで、横芝の神保家といえは、大方の人が承知している地理学者伊能忠敬の実父神保貞恒の生家であります。鳥酔、白雄師弟が訪れたときの当主神保幸宗は忠敬の従弟にあたります。このとき発見された俳諧史料から、神保幸宗は夜松と号し、忠敬の父貞恒も都船と号する鳥酔門下の俳人であることも判明しました。これまで神保家と俳諧の関係は全く注目されていなかったのですが、これにより、俳諧を通してのネットワークが意外な広がりを持つこともわかりました。

この後、鳥酔、白雄師弟は一ヶ月以上も銚子の門人宅を周遊し、江戸に帰ったようですが、明和三年の旅の実相と俳諧の普及―特に房総におけるネットワーク拡大の実情の一部も判明したように思います。



その後、俳諧は天明期にピークを迎えますが、文化文政期から幕末にかけての俳諧は、近代俳句の創始者正岡子規により「月並俳諧」として、その文芸的価値を否定されました。しかし、俳諧の庶民への普及は爆発的なものがありました。その実態と社会的意味については、機会があれば考えたいと思います。

(かとう ときお・千葉県文書館古文書調査員)

